創立50周年に向けて

聖光学院中学・高等学校
校長　工藤誠一

「日本は今次の大戦によって大きな混乱をまねき、教育という面においてさらに崩れを見せている。したがって、それを立て直す必要を痛切に感じているのだが、貴会によって横浜教区に学校を設立していただくわけにはいくまいか」

一九四九年の初めのことであった、ケベック州にあるキリスト教教育修士会のカナダ本部に当時の横浜教区の脇田司教からもたらされた上記の依頼状こそ、聖光学院が創設される始まりとなったのです。

本校の設立の母体となっているのは、ローマに本部を置くキリスト教教育修士会です。戦後間もない一九五一年、カナダ管区から三名の修道士が横浜教区に学校を創設する使命を負って日本へ派遣されたのです。今でこそカナダへの直行便がありますが、当時はプロペラの飛行機で大西洋を越え、ヨーロッパに渡り、インド、香港、東南アジアを越えて極東である日本へとやってきたのです。初めて来日した修道士の一人が、本校の創立に奔走され初代理事長となられたポアトラ先生です。最初は、鎌倉のレデンプトール会の修道会と一緒になり鎌倉周辺の土地を探しましたが、思うとおりの土地が見つからず、次第に横浜地区がその対象になったのです。

一九五一年の十月ころに当時のアメリカ駐留軍が使用していた、若尾氏の所有になる別荘を購入し、姉妹校であるさゆり幼稚園を一九五七年に開設しました。そして、道路を隔てて対面している土地を聖光学院の候補地として定め、購入交渉が始まったのは一九五二年のことでした。

当時、現在の校地の周辺は農地であり、山手駅の裏には牧場もありました。もとの地形は、整地した今日では想像もつかないほどの細長い凹地であり、現在の校庭の真ん中は湿地帯でした。校地造成のためには、なんと四万八千立方メートルの残土が必要でした。整地のために、二年間に数千台のトラックで横浜近郊からありとあらゆる残土を運び込まなければならないほどでした。そして、当時のアメリカ進駐軍の厚意により、当時の日本では珍しかった二台の大型ブルドーザーが、現在の形に整地したのです。

そして、待望の第一期校舎は一九五七年に完成しました。その当時は、講堂や体育館はまだありませんでしたから、入学式も土のグランドの上に椅子を並べて行われました。朝礼や柔道の授業なども、生徒諸君が使っているロッカールームで行われていたのです。

一九五八年、聖光学院は第一回目の生徒募集を行い、横浜市とその近郊から四百五十名の応募者の中から、百九十名が入学しました。この百九十名の新入生こそ、わが聖光学院の第一期生の先輩たちなのです。

学院は順調に生徒を募集し続け、高校生のための校舎や、体育館と講堂を含むラムネホールが落成したのは一九六一年のことであります。この記念すべきホールには、キリスト教教育修士会の創設者であるラムネ神父様の名前がつけられました。また創立十周年記念事業として、さらに教育環境を充実させるために、第二体育館、図書室・階段教室などの付帯設備を増築したのです。

さて、第一期生の入学から十年の後、一九六八年の春、かくいう私も、聖光学院第十一期生として同期の仲間とともに、今と変わらぬ制服に身を包み新入生のガイダンスを受けていました。当時の初代校長であるブルーノ・カロン先生は、開口一番「家から靴とズボン用のブラシを持ってきてロッカーに置きなさい。そして、学校から帰るときは、そのブラシを使って、身だしなみを整えてから下校するようにしなさい」とおっしゃられました。一九六八年のことです。公立の小学校から入学した私にとっては、革靴を履いて学校に通うことも初めてでしたし、ましてや下校する際には靴やズボンにブラシをかけなさいと言われて、どうしていいのかとまどうほどでした。このように、創立の時から聖光生のあるべき姿として、「紳士たれ」という校訓が示され、さらには、外見に劣らぬ紳士としての内面を身につけることが求められていたのです。それはまさに本校の建学の精神や教育理念と深く関わるものなのであります。

聖光学院の建学の精神はカトリック的世界観に乗っ取り、人類普遍の価値を尊重する人格の形成、あわせて、高尚であり有能な社会の成員を育成することであります。そして教育理念をそれぞれ聖書から引用して、次のように示しています。

「人は、たとえ全世界を得ても、たましいを失ったら、何の益がありましょう」というマタイ福音書第十六章二十六節、次に「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」(ヨハネによる福音書十五―十二)そして、「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」(ルカによる福音書六―三十一)。

聖書に示される言葉は、平易であり、人として生きていくうえでは当たり前のことのように思えるかもしれませんが、その理念を真に理解し、人生の中で実行していくことはなかなか大変なことでもあります。聖光に学んだ者たちが高度な知識と的確な判断力を持つこと。そして精神的な価値の優位性を価値観として持つことは大前提であります。世界に羽ばたく有能な人材としての資質は、信条・人種・才能ないし社会的地位にかかわりなく、すべての人々を愛し敬う精神を持ち、奉仕と献身の精神で人々に尽くすことが求められます。また、常に礼を尽くして行動し、義務を全うする。

創立記念日にあたるこの時期には、セピア色に染まった桜の葉が校庭のアスファルトの上を舞っています。この校庭の桜は、今から五十年前に第一期生の先輩と当時の先生方が植えたものなのです。当時は幼児の背丈ほどだった小さなが苗木が、今日、花を咲かせてくれるようになりました。そして、この草木の春を待つ沈黙の風景は、来年四月に入学する第五十一期生を待っているのです。

五十年前にキリスト教教育修士会より派遣された修道士の方々の手により、聖光学院は大きく成長しました。

「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

私は、生徒としては、これまでのブルーノ・カロン先生、ロゼール・フール先生、ロバート・デシェヌ先生、トマス・トランブレ先生と、四人の校長であった先生方を知る数少ない生徒の一人でもありました。この体験を持つのは数多くの卒業生のなかでも第十一期と第十二期の二つの期だけです。

また、このほかにも多くの修道士の先生たちに、在学中は生徒として、そして卒業後は教員として教えを受けてきました。

私にとっては創立当初からの建学の精神を守り、ブラザーの先生方に学んだことを次代に学ぶ生徒諸君に引き継いでいくことが大切な使命であると考えています。

私ども聖光学院は、今日のこの日を境に新たな五十年への歩みを始めることになります。その前途に、そして在校生、卒業生さらには関係者の皆様に神様のご加護がございますようお祈りいたします。

そして、今後とも多くの皆様から引き続きのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げる次第であります。

22期60名が集う

平成二十年六月十四日土曜日ポアトラホールにて十数年ぶりに、22期の同窓会が開かれました。六十名を集めて盛大な会となりました。

それぞれが、今どんなことをしているのか聞きたいじゃないか!ということで、司会の〝短めにお願いします〟という切ない叫びも虚しく、一時間以上に及ぶ六十名一人ずつのスピーチ大会が始まりました。やはり久しぶりということもあり、なかなか一言じゃ語り尽くせないそれぞれの過去、現在、未来を真剣に耳を傾けておりました。仕事のこと、家庭のこと、これからの夢…それぞれが、これからを応援しあおうとエールが飛び交いました。

高三で担任をしていただいた村山先生、鈴木先生、茂木先生の二十五年前と変わらぬ饒舌なお話にも懐かしさになごんだ雰囲気が漂っておりました。

次回、また元気で会おうという約束をかわし、聖光学院を後にし、二次会へと向かいました。

十数年ぶりとなった22期の同窓会

27期ゆったり同期会

昨年は聖光学院も五十周年記念ということで大いに盛り上がった一年でした。しかし、その祝典の席上、再会した我が同期は残念ながら僅か数名。二十期代後半は、在学中色々なことがあり、学校との関係が薄い…との噂もちらほら。なにしろ、各代が丸テーブルを一つないしは、二~三代で少なくとも一つの丸テーブルを囲んでいたにもかかわらず、なんと27期は、あまりに参加予定者が少なかったためか、寸前までパンフのテーブル表に代の記載がないほどだったのです。

しかし、集まった少数精鋭のメンバーは、直ちに同期会開催を決定し、折りしも鈴木敏夫先生が退職されるとのことで、旧F組を中心に三十名以上の同期が、春まだ浅い三月八日、学校裏手のザビエルセンター(修道院内に設置された、聖光学院高三生用自習施設)食堂にて一同に会したわけです。我々の代を知る現職の先生方はだいぶ少なくなりましたが、三月をもって専任教員としての御定年を迎え、講師となられた森孝先生はじめ、十名近くの先生方もご参加いただき、ゆったりとした親睦の時間を過ごすことが出来ました。卒業以来初めて開かれた前回に比べればこじんまりとした会になりましたが、一人一人がお互いに会話が出来、交流できるいわゆる適正人数での同期会だったと言ってよいでしょう。

特段大きな企画もありませんでしたが、まさに同窓会をやったという感じです。最後にお土産にと、懐かしのホシバベーカリーの惣菜パンが、一人一個ずつ配布され、小さな歓声があがりました。そして名残を惜しみつつ、パンを片手に、さわやかに会は幕を閉じました。きっとまた数年後、また開催されるでしょう。その日を楽しみにしつつ、そんな感じでゆるゆると行きましょう。

滝之上会ゴルフコンペ

5月6日　花生カントリークラブにて

第十四回滝之上会ゴルフコンペが、平成二十年五月六日に花生カントリークラブにて卒業生中心に五十二名が参加して行われました。

競技は新ペリア方式で行い、優勝は9期の中村裕さんでした。幹事は、吉永昌生滝之上会会長を中心に、11期生が務めました。

次回は平成二十一年五月六日(水)に、今年同様ゴールデンウィークの最終日に開催します。

退職された先生

鈴木　敏夫(すずき　としお)

昭和二十五年八月二十九日生
昭和五十一年四月一日~昭和五十二年三月三十一日
(理科非常勤講師)
昭和五十二年四月一日~平成二十年三月三十一日
(理科教諭)